１．本研究の経過

(1) 調査研究活動

今年度も、とくに初期は新型コロナウイルスの流行のため調査活動が制約された。その間、学術誌『地図』に 2021 年 12 月に投稿した論文は、2022 年 3 月 25 日に受理されたとの通知があり、4 月以降になって刊行されることになった。

鳴海邦匡・渡辺理絵・小林茂 2022.「台湾遠征～日清戦争期までに台湾の主要港湾について作製された英国製海図翻訳（覆版）にみえる地名表記」地図（日本地図学会）60(1): 17-35.

また学術雑誌『地理学評論』にも 4 月 29 日に投稿し、10 月 11 日に掲載が決定し、下記のように刊行された。

小林茂 2023.「日清･日露戦争期に向けた日本の気象観測網の海外への拡大と電信ネットワーク」地理学評論（日本地理学会）96(1): 33-56.

その間、アメリカ議会図書館での調査が急がれ、小林と大坪は、8 月 29 日～9 月 11 日の予定でワシントンに出発し、地理・地図部のミーンズ･節子さんらのお世話をいただきながら、順調に調査を進め、9 月 12 日に帰国した。小林は、日清･日露戦争期作製の外邦図のうち、日本国内で閲覧が困難な「東亜五万分一圖」（1900～1902 年に主に福建省で測量）や 2 万 5 千分の 1 南京近傍図（1905 年以降清国江蘇省の南京陸地測量司が測量･印刷した 2 万分の 1 図を、陸地測量部・参謀本部が 2 万 5 千分の 1 に縮刷した地図群）のスキャンを行った。「東亜五万分一圖」は国立国会図書館も収蔵するが、ごく一部分にすぎず、アメリカ議会図書館での閲覧が不可欠である。他方南京近傍図は、国内では東京大学と筑波大学が収蔵し、また大阪大学が東京大学収蔵図の写真版を保有するが、刊行図の半分以下と推定され、全容を知るにはアメリカ議会図書館所蔵図の参照が要請された。

小林は以上に加えて、日露戦争期に捕獲したロシア製図から作製した野戦用図の元図の調査も行った。アメリカ議会図書館は、遼東半島をカバーする縮尺 8 万 4 千分の 1 ロシア製図を多数収蔵し、日本軍作製の野戦用図（本誌 13 号で報告）の元図となったと思われる図のスキャンを実施した。

他方、大坪は清末期に中国の高級官僚、洪鈞が刊行した「中俄交界全圖」（1890 年刊）の元図となったロシア製図・英国製図を探索した。アメリカ議会図書館蔵の「中俄交界全圖」を閲覧するとともに、同館蔵のパミール高原を描くロシア製図と英国製図（19 世紀後半作製）を検討し、ほぼ元図を特定することができた。

以上の成果の一部をもとに、小林は 11 月 20 日に京都の佛教大学で開催された人文地理学会大会で、下記のような口頭発表を行った。

小林茂「日露戦争における日本軍の野戦用地図の準備過程」『2022 年人文地理学会大会研究発表要旨』40―41 頁.

他方小林は、アジア歴史資料センターが公開している『陸地測量部沿革誌（稿本)』（1916 年ころ完成した謄写版刷りの書物）に注目し、類書（『陸地測量部沿革史（草案)』および 1922 年刊行の『陸地測量部沿革誌』）と比較対照し、またその原本の所蔵者が初代陸地測量部長の小菅智淵の子孫であることを確認した。この結果、『陸地測量部沿革誌（稿本)』は陸地測量部で準備されたもので、『陸地測量部沿革誌』の原稿と

考えることができるが、前者から外邦測量に関する記事などを削除しつつ後者が刊行されという事情を考慮すると、その間に大きな編集方針の変更が行われたと判断するに至った。

またこの変更に伴って削除された記事には外邦測量以外にも、重要な記事が多数みとめられるため、『陸地測量部沿革誌（稿本)』の刊行を不二出版に打診したところ、認められ、その解説文を準備した。また編年体の書物である『陸地測量部沿革誌（稿本)』だけでなく、初期の外邦測量に従事した古参の技術者の座談会（1936年実施）の記録である「外邦測量の沿革に関する座談会」も合わせて刊行することを提案し、その解説文も準備することとなった。現在、これらのテキスト並びに解説文の校正に着手しており、4 月以降刊行される予定である。

なお、2023 年となってから新型コロナウイルスの流行が下火になってきたことを受けて、3 月 1 日に栗栖晋二氏（東京大学理学研究科）と故佐藤久東京大学名誉教授のお宅を訪問し、ふさ夫人よりお宅に残されている佐藤教授収集の陸地測量部など戦前の地図作製に関する資料の寄託を受け、東大博物館の地理部門に搬入した。また翌 3 月 2 日にはその整理を行った。本号では、その一部について、2021 年 11 月に搬入した資料の分もあわせて報告している。搬入する資料を準備して下さったふさ夫人に感謝したい。

(2) 現在編集中の外邦図研究ニューズレター

以上のような報告に関連して、現在編集中の外邦図研究ニューズレター14 号との関係について、触れておきたい。

2022 年 8～9 月に行ったアメリカ議会図書館での調査は、まず大坪「19 西紀広汎のロシア・イギリス製アジア図と中俄交界全図」に反映されている。また「東亞五万分一圖」に関する調査は、小林「中国福建省における北清事変（義和団事件）期の測図作業とそれによる『東亞五万分一圖』について」の基本資料となった。

他方、大田寛之氏の「『測量隨録 原稿』 とその内容について(3)」は、外邦図研究ニューズレター12 号掲載からはじまる連載で、日清･日露戦争期の外邦測量について、古参の技術者の貴重な回想を含んでいる。

なお末尾には、上記のように東京大学博物館に搬入した故佐藤久東大名教授収集の空中写真関係資料の一部を速報的に紹介している。

(3) 2022 年度末の海外資料調査

なお、この外邦図研究ニューズレター14 号を印刷所に入稿してから、小林と大坪は再度アメリカ議会図書館で資料調査を行う予定である。大坪は、上記の「中俄交界全圖」の元図の補足調査を予定している。また小林は上記「東亞五万分一圖」ならびに 2 万 5 千分の 1 南京近傍図の補足調査（地図の図法の確認のための計測ならびに「東亞五万分一圖」の元図になったと推定される英国製海図の探索）のほか、日清･日露戦争期に作製された朝鮮半島の 5 万分の 1 図の調査を行いたい。

この調査は本来であればもっと早い時期に行うべきであったが、新型コロナウイルスの流行のため、やむなくこの時期にずれ込むことになった。今後は資料調査の成果を早く発表できるよう努力したい。